

パネルセッション(企画)

複数言語の環境下にいる子どもとその保護者のバイリンガルな心理相談から見えるもの
—発達障害、それとも一時的リミテッド？現状と課題—

田中ネリ (四谷ゆいクリニック)

1. はじめに

外国人が集住する地域において2004年からスペイン語での心理相談を実施してきた。群馬県のカトリック教会で開始し、それから埼玉県のリテンアメリカ人コミュニティ、さらに虹の架け橋教室を実施している神奈川県の NPO の依頼によって、主にラテンアメリカ人を対象のアウトリーチの心理相談を実施してきた。

2. 子どもの相談

大人の心理相談とともに、段々と子どもの相談が増加、特に虹の架け橋教室では子どもに関する相談に特化していた。そのなかで「子どもの言葉が遅れている」、「学校から発達検査を受けるように言われた」、「子どもが ASD (自閉症スペクトラム障害) の診断を受けた」等、保護者から言語と発達に関する相談を受けてきた。演者は発達障害が専門ではないが、バイリンガル臨床心理士であるため、子どもの言語とその行動を観察しながら専門的なアセスメントの必要性の有無を判断してきた。

3. ケースから見えた問題点

- 3.1. 「よくわからない子」としてとらえられていた M くん
- 3.2. 言葉がわかりにくい B ちゃん、C くん、D くん、そのちがいは
- 3.3. 特別支援学級の在籍から普通級に替わった A ちゃん
- 3.4. WISC-IV を二言語で受けた結果、FSIQ が 21 点上がった E くん
- 3.5. JSL 対話型アセスメント (DLA) からみられた A くんの ASD の特徴
- 3.6. 子どもの保護者の辛さと否認

4. ケースを通してみえた課題

- 4.1. 子どもに関わる多職種の連携
- 4.2. 子どもの発達の横断的な追跡
- 4.3. WISC-IV の教示の通訳の統一
- 4.4. 子どもから発するコミュニケーションを検討するための DLA の質的研究
- 4.5. 子どもと保護者を支援する専門家の育成